地域おこし協力隊通信

第14回

リポーター：森山健吾 隊員

皆さんこんにちは!!
14回目の協力隊通信です。今回は、コーチとして活動している潮来ソフトテニススポーツ少年団（以下スポ少）の話題をお届けします。

新型コロナウイルスにより三ヵ月以上も活動自粛となっていましたが、ようやく再開となりました。活動再開となっても、これまで通りとはいかない部分もあります。活動の人数制限や密にならない練習内容、また、活動前の体温測定など予防を講じたうえでの活動になっています。そのようなかたちの活動再開でも、久しぶりのテニスを楽しんでいるこどもたちを見ることができました。また、私自身元気な姿のこどもたちを見ることができ、安心しました。こどもたちにとって活動できなかったこの自粛期間は、テニスができることに改めて感謝する機会になったのではないでしょうか。

そして、活動再開のタイミングでこれまでずっと延期となっていた「卒団式」が行われました。例年のようにはいきませんでしたが、卒団するこどもたちを送ることができました。一つの節目として卒団するこどもたちはもちろんですが、保護者の方にとっても感慨深いものだったのではないでしょうか。（私にとっても今回の卒業生は、スポ少に入団してから初めて1年間じっくり関わることができたこどもたちでした）

昨今の新型コロナウイルスの影響により、目まぐるしく変わる生活環境にこどもたちも不安や戸惑いを抱いていると思います。卒団するこどもたちには、スポ少で得た経験を糧に失敗を恐れず、さまざまなことに挑戦しながら、目標や夢を叶えてほしいと思います。

まちづくり・潮来の自然と歴史を知る

潮来市の誇れる自然

第53回

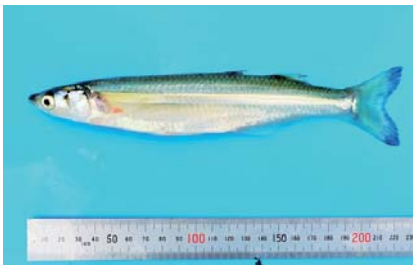
水郷の魚たち―ペヘレイ

北浦湖畔にある私たちの研究施設では、北浦の魚類相がどのように変遷しているのかについて調べています。今年6月のモニタリング調査時に、最近では珍しくなった外来魚のペヘレイ（写真）が網にかかりました。一見するとボラに似ていますが、体形がもっと細長く、顔が尖っているのが特徴です。

ペヘレイ（Pejerrey）は南米のラプラタ川流域原産で、名前はスペイン語で「王の魚＝美味な魚」を意味します。その肉質はキスのような白身で、脂も少しのっていて、フライや天ぷら、ムニエルなどに向いています。

日本では1966年にアルゼンチンから養殖試験用に卵が持ち込まれたのが最初です。霞ヶ浦・北浦では1980年代にはじめて生息が確認され、1990年代後半から2000年代前半にかけては優占する魚種のひとつとなり、ワカサギ漁で大量に混獲されていました。湖での生息域がワカサギと重なっており、動物プランクトンや水生昆虫、エビ、小魚などを食べる習性があることから、当時は競合や捕食などによるワカサギへの影響も懸念されていました。ただ、美味しい魚ではありますので、名物として扱うお店も一部にあり、私の研究室にもペヘレイを好んで食べる学生がいました。

北浦での魚類相のモニタリング調査



北浦で採集されたペヘレイ（体長約20㎝）

ところが2011年くらいから状況が一変。霞ケ浦・北浦のペヘレイは急に減りはじめ、最近はまれに採集されるのみです。北浦で私たちが採集したのは、じつに9年ぶりになります。ペヘレイがなぜ減ったのかはよくわからず、そして、いつまた増えてくるのかも予測しづらいのが実状です。これからも魚類相のモニタリングをしながら、動向を注視していくことになりそうです。

茨城大学地球・地域環境共創機構水圏環境フィールドステーション
加納　光樹